

■（121）偶然会った元新聞奨学生の2人、今は…

「実はかつて、新聞奨学生でした」。並んで座る消防署の幹部2人が口をそろえた。学生時代に新聞販売店に住み込み、朝刊や夕刊を配りながら学校に通ったという。年配の幹部は付け加えた。新聞で消防職員の募集公告を見たのが、今の仕事の出発点だった、と。

奨学制度を運営する組織のホームページを閲覧すると、進学先に有名大学がずらり。新聞配達の給料のほか、入学金や授業料が実質支給されるので、親に負担をかけないで遠方の学校に進める制度という。予備校生もOK。全国紙1紙だけで数百人募集している。

最も遊びたい年代なのに……。そんな多くの頑張り屋に、新聞の宅配制度は支えられている。仕事で出会った若手配達員も、数ある仕事の中で新聞販売店を選んだ理由をこう語っていた。「昼間に俳優学校に通えるから」「住み込みで生活費を節約し、夢を実現するための資金を貯めたい」。もしかしたら挫折もあるかもしれない。でも、新聞を通じた仲間として応援したい。

25年前、新入記者研修で販売所に行った。朝刊を配り、購読契約も1件とれた。その成果が実は「お膳立て」だったことを後で知った。奨学生たちに顔向けできません。(山)